



## 一 天上にて

---

ここは、天上世界。赤やピンク、緑にブルー、ゴールドにシルバーなど、多彩な服を着た神様たちが暮らしている。その服は、シャツやズボンではなく、ふとんのシーツのようなもの被っているだけだ。

神様たちは、男女の区別もなく、時間や空間、生死さえも超越した存在だった。未来も、過去も、現在も、縦も、横も、高さも、思うがままだ。ある意味で、自由であることは不自由でもあった。自分たちが何でもできるということは、かえって面白みがないからだ。

もっと、何か刺激のあることがやりたかった。だが、その刺激もすぐにやりとげてしまうので、飽きるのも早かった。そのため、ほとんどの神様は、雲のようなふんわりとした絨毯の上で寝そべって、一日を過ごしていた。つまらなければ、一週間時間を早めたり、十年後に戻ることもできた。

ある時、グリーンとオレンジの服を着た神様が、全知全能である自分たちが直接勝負したところで、結果は引き分けに終わることはわかっているのに、人間にあるものを渡したらどうなるのか、賭けをすることにした。

「オレンジ神様。人間に不思議な力を持つクレヨンを渡そうと思っています。それで、人間の世がどうなるかを賭けませんか？」

「それは、面白い、グリーン神様。それで、どういう賭けにしますか？」

「人類が平和に活用し、ますます発展するか、それとも、戦争を起こして滅亡するか、どちらかでどうでしょうか？」

「いいですよ。それで、グリーン神様はどちらを選びますか？」

「私が提案した賭けです。あなたが先に選んでください。残った方が私でいいです」

「わかりました。それなら、私は人間が発展する方に掛けます」

「オレンジ神様は性善説ですか。それなら、私は人類が滅亡する方に賭けます」

「賭けに勝った方は何が得られますか？」

「あなたが勝てばこのグリーンの服を、私が勝てば、あなたの服をもらいます」

「ははははは。それなら、どちらが勝っても

お互いの服を交換することになりませんか？」

「積極的な意志と消極的な意志での交換では意味が違うと思いますよ。どうでしょうか？」

「面白い。どうせ、暇をもてあましている身です。長年着続けたこの服にも飽きました。この賭けに乗りましょう」

「ありがとうございます。それじゃあ、早速、賭けを始めましょう。それ」

グリーン神様は、懐からある物を取り出すと、地上に向けて放り投げた。

「さあ、結果が出るまで、昼寝としましょう」

「どうせ、まばたき一回で、勝負がつきますよ」